

2011.5.7

マレビト・ライブ vol.1 「N市民 緑下家の物語」① 上演テキスト

作／松田正隆

稲光のひとり言① 実は次男との対話。でも、はたから見るとひとり言なのだ

「稲光」

「なに」

「お前、陽兄さんのことが嫌いなのか」

「嫌いじゃないけど、好きってわけでもないな」

「なんで」

「なんていうか、好き嫌いっていうか。ま、苦手なのかな」

「そうか」

「次男兄さんはどうなの」

「うーん、そうだな。陽兄さんのちんぽはおおきいぞオ」

「ちんぽの話はしてないぞ」

「そうか」

「そうだなあ、気が合わないというか。話ができないっていうかさ」

「なにがそうさせるのだろうか」

「気分の問題かなあ」

「ちえつ、気分なんて糞だな」

「なんすか、いきなり」

「気分なんて糞だ。」

「やめろよ。意味わからんし、糞とか、ちんぽとか、下品だから、やめようさ」

「おれ、気分とか、わからんし」

「あっ！気分とかがないのか、次男兄さんには。ごめんごめん」

「ないのかとか訊くな。気分の所在自体があやふやなんだ」

「そうか」

「そうやって、落ち込むのか」

「えっ？」

「そうやって、これ見よがしに、気分のあるやつは落ち込むのか」

「そうじゃないけどさ」

「け、せんずり主義者」

「なんだよ。主義者って」

「ぷっ」

「ぷっ」

「陽兄さんは太陽のようなのう」

「まあなあ。お母さんは好きなんだろうな、陽兄さんのことがなあ」

「稲光のことは？」

「まあまあ、なんじゃないかな」

「おれのことは？」

「次男兄さんのことか」

「もう忘れてるかな。お母さん、おれがこの世に生きていたことなんて」

「そんなことはないよ」

「そうかな」

「そうだよ」

「次男兄さん」

「……………」

「次男兄さん」

「……………」

「次男兄さん」

「おおっ？」

「なんだよ。どこいったの？」

「ちょっと、おれにもわからなかった」

「そういうときって、いつもは、どこにいるんだい？」

「わからない」

「わからないのか」

「わからないな。実体のないおれだもの。基本、いないわけだろ、おれは、いないというか、おれはおまえだろ。おまえのなかにいるおれなわけだから、どこにいるってたってそんなにうまく答えられないだろ」

「おれである稲光はときとして次男兄さんだ」

「そうそう。で、おれは次男でありながらもおまえ稲光さ」

「うん」

「基本、いないことが前提で、あるとき、おれはおまえにいたりするんだろう」

「そうだね」

「なんか、おまえとかさ、たまには、おれなんかの存在は世界の闇的なはざまに落っこちた輩だなんて思うのか？」

「いや、そんなことは思わない」

「思うなよ、絶対」

「思わない」

「思うなよ、絶対」

「思わない」

「だったら、たとえば、いま、突然、いなくなってみるぞ」

「えっ」

「……………」

「次男兄さん」

「……………」

「次男兄さん」

「……………」

「……………」

「もしもし。もしもし。って言ってみろ」

「え」

「なあ。そこからさ、もしもし。もしもし。って言ってみろよ」

「もしもし。もしもし」

「おれは、電話じゃないぞっ！」

「あ、次男兄さん。次男兄さん。……………行かないでくれよ。兄さん。兄さん。次男兄さん！」

## 稲光と陽の対話① タマフマラ族

「おまえ、なにしゃべってたんだよ。なんか、ぶつぶつ言ってたぞ。また、ひとり言か？ うん？」

「……………」

「誰か、いるの」

「……………」

「ま、いいけどさ。すわれよ。突っ立ってないでさ。ベンチあるんだから。すわれって」

「最近、なにしてる」

「陽兄さんは」

「おれか、仕事だよ」

「そう」

「おまえ、なにしてんだよ」

「・・・バイトしてるよ」

「そうか」

「いつから、いたの」

「さっき」

「へえ」

「おれ、映画に出るんだよ」

「映画」

「映画だよ。映画」

「なんの」

「友だちの、映画」

「友だちの映画って、なに」

「なんか、刑事なんだよ」

「刑事。役者ってこと」

「役者ってことかな、で、ま、刑事やるんだよ、おれが」

「へえ。兄さんが刑事」

「こう、なんか、走るんだよ。刑事だから」

「あ、そう」

「犯人を追いかけてさ」

「追いかけて走るんだ」

「そうそう。多分、そうだと思うよ。走ってって言われたし、そいつ、その友だち、東京の大学で映画撮ってて、こっち帰って来て、ここいらのいりくんだ坂道をおれに走らせたんだってさ」

「誰。友だちって」

「駅前で知り合ったやつ」

「え、誰」

「大学生。いや、大学出たって言ってたかな。そいつ」

「こっちの人じゃないの」

「こっちに中学までいたんじゃないかな」

「N市駅？会ったのは」

「いや。ウラカミ」

「へえ」

「なんで、どこだっていいだろ、そんなの」

「ああ、まあ、ね」

「ちょっと、おれ、走るから、見てろよ」

「え」

「どう」

「どうって」

「なんか。変じゃないか」

「え。ああ、いや、とくに、へんじゃないけど」

「そうか。このへんとか、おかしくない」

「いや、おかしくないけど」

「そう」

「おまえも走れよ」

「え」

「おまえも走れって」

「いや。いいよ」

「おまえ、タマフマラ族って知ってるか」

「いや。知らない」

「このあいだ、本で読んだんだ。メキシコの山間部にいる狩猟民族で、足がとても速い」

「へえ」

「世界で一番走るのが速い。オリンピックの陸上競技をタマフマラ族に見せたら、なんと遅い奴らばかり集めたもんだ、しかも、走る距離もあれで終わりか、短かすぎるぞと言ったそうだ」

「ほう」

「獲物がいるとするだろう。それを、走って行って捕ってくるんだ。すごいじゃないか。武器なんか使わない。ただただ、走るんだ。走って走って、走って行って追い込んで、獲物がくたばったところを捕まえるんだ。おまえにできるか、そんなこと」

「できないよ」

「できないだろ。おれにだってできない」

「獲物は、鹿とか、猪とかかな」

「そう、野生の動物なんだ。そのへんの犬とか猫を追いかけるんじゃない」

「そのへんの犬とか猫でも追いかけたりできないし、おれたちは追いかけたりしたことはないよ」

「そうなんだ。ということは、正真正銘の野生動物がどれほど俊敏かはもはやおれたちにはわからないじゃないか。それを、追いかけて行って、槍とか弓とか、ましてや猟銃とかじゃなくてさ、タマフマラ族の少年たちは、とにかく走って捕まえるっていうのに感心するじゃないか。すごいと思う。たとえば、こうそっちへ獲物が逃げると、そっちへ、ただただ走って行くだけなんだ。あ、え、そっち？ええい、畜生！ばーんってなことにはならない。ねらいを定めた獲物にむかってひたむきに走るんだ。走って、走って、走るんだ」

「おまえ、運動会で走るの速かったのか」

「普通じゃないかな」

「おれは、3番とかだったな」

「おれは、できることなら、風のようにになりたいよ」

「マリーがそこを通るからさ。おれ挨拶しようかなって思って、おれは、ここにいるんだ」

「なんかさ。勘違いしてもらったら困るんだけど、おれが映画に出たからって、人になにかをアピールしたいってわけじゃないんだぞ。映画俳優になって、東京行くとかってことはない。俳優なんて薄汚い破廉恥な商売じゃないか。そんなのに、なりたいわけじゃない。表現するか言う奴いるだろ。おれ、あんなの嫌いなわけさ。表現者。なに表現者って。おれだって、おまえみたいに平凡な人生がいいなと思ってる」

「なんか、言えよ」

「え。なんかって」

「なんかさ。おまえさ、たまにそんなふうにさ、そうやって、しゃべんないってのも、一種、人を追い込んでるってこともあるわけだろ。どういうことかわかるか」

「いや、わからない」

「おまえってさ、結局なんにもないわけだろ」

「え」

「それなのに、こっちは、なんかあるって思うだろ、黙ってられるとき」

「そう？」

「そうだよ。なんにもないやつはそれなりに、なんにもないなりに、なんかうまいこと相づち打つような、返事っぽい言葉とか言うもんなんだよ。なんにもないですって、はっきりさせて、そこにいてくれよ」

「どうすればいいの」

「知らないよ、そんなの」

「あ、じゃ、おれ、行くわ」

「ああ」

「ちょっと、行って来る」

「うん。パチンコ？」

「いや、仕事」

「そう。兄さん、いま、なんの仕事してるの」

「うん？ じゃ、ちょっと、行って来る。また、戻ってくるから」

「あ、そう」

「マリーが、そこ通ったら、すぐ戻ってくるからって伝えてくれ」

「うん」

「おまえ、マリー、わかる？」

「いや」

「大丈夫だ。なんか、おれを探してそうな女がいたら、それがマリーだ。な」

「うん」

「わかった？」

「うん」

「おまえさ、おれにさ、マリーって誰？って訊けよ」

「え、ああ、マリーって誰なの」

「あはは。教えない。あはは」

「ハマノ町の居酒屋で働いてるんだ」

「え、兄さん？」

「マリー」

## 稲光のひとり言② メール

「元気？ 今日、中央線沿線でアパート探してます。見つかったら連絡するね」

「稲光」

「あ。次男兄さん」

「誰からメール来たんだよ」

「東京に行った友だちから」

「女か」

「まあ、女だけど、高校のときの友だちだよ」

「おい、見つかったら、連絡するねって言ってるぞ」

「うん」

「連絡あったら、おまえどうする」

「どうって」

「東京行くのか」

「行かないよ」

「行けよ」

「行かないよ」

「なんで、行けって。行って、その女のところに転がり込め、そして、朝がたになったらおっぱいを触るんだよ」

「なんで朝がたなんだ」

「朝は、女も寝てるだろ、ま、おまえの横に、ちょっと離れて寝てるな。狭い部屋だ、手を伸ばせば、おっぱいに届く距離だ。女は、これ見よがしに、胸をこう、なんか、こんな感じで、ひけらかして眠っているから、そこを、こう撫でてみるんだ、すると、かすかに、あーんとか言うだろ、で、そのまんま、なし崩し的に、顔からいくんだ、顔からだぞ、なし崩し的に、もぞもぞと、こうやって顔の全面を使って」

「そんな、うまくいくわけないだろ」

「次男兄さん。次男兄さん」

「また、いなくなったのか」



「ああ。うーん。そんな、彼女はそんなのじゃなくってさ。おれには、いい友だちなんだ。たまに、メールくれるだけで、そんなことあんまり意識したことなんて、ないよ」

「次男兄さんってさ、お母さんの声聞いたことがあるの」

「聞かせてやろうか」

「次男兄さんは生まれてすぐ死んだから、お母さんの声を知らないだろう。だから、可哀想に思って、お母さんは自分の声をテープに吹き込んで、天国にいる次男兄さんに聞いてもらおうと思ったんだ。じゃ、いくよ」

「うん？ そう。これがお母さんの声」

「歌がとってもうまいんだ。今でもこれを、たまに歌ってくれるよ」

「いや、うそじゃないって」

「いや、歌っているのはお母さんだよ」

「春なの一にーおわかれですーかー。春なの一にー涙がこぼれますー。え、まあ、いまはもう初夏なんでけどね」

稲光、街の様子をテープレコーダーに吹き込む。それを、街角の男に咎められ説教され、あげくになけなしの金、千円を取られる。

稲光と陽の対話② 世直し

「稲光」

「あ。陽兄さん」

「おまえ、世界が今どうなっているのか、とか考えるか」

「考えない」

「そうだろ、おまえは考えないタイプの凡人だ。おれもまあ、似たようなもんだった。でも、すこしは考えるようになったんだ。世の中のことをな」

「へえ」

「世界はな、いろいろな問題に直面してるんだぞ」

「おまえ、口が硬いか」

「口？」

「今から、おれが言うことを誰にも言ったらいけないぞ」

「うん」

「おまえ、絶対に言うなよ」

「うん」

「言うなよ」

「うん」

「おれはさっき、このことを、ボスから打ち明けられたんだ」

「ボスって誰」

「うん？だから、仕事のボスだよ」

「ああ。そうか」

「ボスはな。市長を殺すつもりなんだ」

「え」

「市長だよ。市長。N市の市長」

「ええ」

「驚いたか」

「うん」

「びっくりしただろ」

「うん」

「おれも、びっくりした」

「おまえ、誰にも言うなよ」

「うん」

「絶対、言うなよ」

「うん」

「おまえ。うっかり、言うだろ」

「言わない」

「ああ、ああ、こんなこと言わなきゃよかった。ボスに、誰にも言うなって言われたんだ。ああ、ああ。おまえになんか、言わなきゃよかった」

「なんで殺すのか訊けよ」

「え」

「ボスが、なんでこの街の市長を殺すのか、おれに訊けよ」

「ボスはなんで市長を殺すの？」

「それには深いわけがある」

「そう」

「聞きたいか」

「いや。聞きたくない」

「聞けよ」

「え。じゃ、聞くよ」

「決起するんだ」

「決起？」

「決起」

「ふーん」

「けっき」

「けっき」

「世直しのために立ち上がるんだそうだ」

「テロってことか」

「うん。ま、テロってことかな」

「テロか」

「テロだよ」

「やばいな」

「やばいよ」

「市長は悪いやつなのか」

「悪い。と、言うわけさ、ボスは。議会で天皇陛下にも戦争責任があると言ったそうさ。ということ、この街に原爆が落ちて焼け野原になったのも、ある意味、天皇陛下のせいだということだ」

「え、どうして」

「日本がアジアにむけて戦争をし始めたから、アメリカが原爆を使って、戦争を終わらせることができたということらしい」

「なるほど」

「そういうことを言う奴を、ボスは許せないらしい」

「そうか」

「でも、アジアにむけて戦争をし始めた日本が、どうしてアメリカから原爆を落とされなければならなかったんだろうか」

「そんなこと、知らないよ。どうでもいいだろ、そんなこと」

「え。あ、そうかな」

「おまえ、どう思う」

「どうって」

「天皇陛下に責任あると思うか」

「市長は天皇がいたからこそ、あの戦争は始まったと発言し、それをボスはどうしても許せないと言った」

「兄さんはどう思うの？」

「ボスは、市長に天誅をくださのを決行することになったとき、おれにそれを見届けて欲しいんだ。そして、市長の命を取ったとわかったら、そのあと、ボスは腹を切る。で、それがうまくできないときに、おれに手伝ってほしいということなんだ」

「手伝うって？」

「腹を切るのをためらっていたら、ちゃんと腹を切るようにして欲しいそうさ。つまり、おれ

がボスの自決を助けるということだ」

「ああ。そういうことか」

「それで？」

「それでって、なんだ」

「兄さん、どうするの」

「どうしよう」

「大変なことになったな」

「うん」

「決起の日が決まったら、ボスから連絡が来るんだ」

「そいつを殺すことに正当な理由があれば、おれはそいつを殺さなければならないと思うよ」

「ま、そう、頭では理解しているつもりなんだ」

「おまえ、めし食った？」

「あ、いや」

「行こう」

「え」

「コンビニ、行こう」

「ああ。うん」

### 稲光と陽の対話③ 家族の写真

「おまえ、イワヤ山登ったの覚えてるか」

「え、いや」

「親父とおふくろと、ユミ姉さんとおれとおまえとで、登ったんだ」

「おれもいたのか」

「おまえもいたよ」

「へえ」

「おまえまだ小さかったよ」

「うん。覚えてない」

「おにぎり食べたよ」

「へえ」

「え、写真？」

「うん、そのときの」

「どうしたの。よく、こんなのあったね」

「うん」

「親父も、そのころは元気だったな」

「うん」

「それ、ユミ姉さん」

「ああ。うん」

「どうしてるかな、ユミ姉さん」

「うん」

「このころまでは、5人、みんな、一緒だったんだよな」

「ふん。やけに感傷的になりやがって。け。糞みたいな家族愛に溺れやがって。ずっと、ひた  
ってろ、ばーか」

「え」

「この愛国主義者。この男根中心主義者め」

「稲光」

「あ。」

「どうした」

「あ。いや」

「いま、次男兄さんが顔を出したんだ」

「次男って」

「三男のおれと長男の陽兄さんとの間に生まれた次男、次男兄さんのことじゃないか。次男兄

さんは、こうしてたまにおれの中に現れる。そして、おかしなことを口走るのさ」

「おまえ、大丈夫か」

「ユミ姉さんはこの街のどこかにいると思うか」

「どうだろ。いないんじゃないかな」

「いるかもな」

「そうかな」

「おれの知り合いがさ、このあいだ、見たって言うんだ。ユミ姉さんを。風俗で働いてたって。なんか。腹立って、ぶん殴ってやったよ。で、逆に、ぶん殴られたけど。あはは」

「ほら、ここ」

「ああ。だいじょぶ」

「だいじょぼない」

#### 稲光と陽の対話④ 稲光、陽にくってかかる。

「おまえにはビジョンがないって、言われたことがある」

「あ、そう、だれに」

「陽兄さんに言われたことがある」

「おれ、そんなこと言ったのか」

「言った。こういうことは、言ったほうは覚えてなくても、言われたほうは覚えているもんなんだ。で、たまに、そのことを考えるんだけど、ビジョンってなに？」

「ま、おまえの人生における明確な目的というか、具体的な自己実現のための方法というか」

「おれは、自分のビジョンがわかるには、おれ自身がなにを見ているのかがわからないといけないと思ったよ。おれを起点にしての世界の見え方がはっきりしないと、おれのビジョンは見えないじゃないか」

「そうかな」

「そうだよ。おれの起点ということは、おれのこの、おれっぽいと感じる、このおれらしき、おれだろ」

「そうだよ、おまえだよ。おまえはおまえじゃないか。ほら、ほら、ほら」

「やめろよ」

「おまえ、なに言ってるんだ」

「息を吐いたり吸ったりするじゃないか。その息の出入りの領域まで、おれの領分だろうか。おれの皮膚はおれだけど、汗はおれなのか。どこまでがおれでどこからがおれじゃないのか」

「そんなこと知るかよ」

「そんなこと言うなよ、兄さん。そんなことばかり言うなよ、兄さん」

「なんだよ、さっきから。どうしたんだよ」

「さっき、ユミ姉さんの幻を見た。ということは、幻のところまでは、おれのビジョンだろ」

「だから、ビジョンというのはそういうことじゃなくて、おまえの目標だよ。いいか、生きる目標のことだ」

「あ、ほら、ユミ姉さんが立っている」

「どこ」

「この街のすみずみまで、おれの声で描写したいと思っている。すると、この街がおれのものになったような気分になる。それに、ユミ姉さんが帰って来たとき、ユミ姉さんがいなかったあいだのこの街のことをユミ姉さんが取りかえす手がかりにだってる」

「おまえ、さっきのちょっとやってみろ」

「え」

「さっき、次男になってしゃべったじゃないか。おれに、悪態ついたじゃないか。あれ、もう一度やってみろよ」

「できない」

「なんで」

「そういうのじゃないんだ」

「え。なんだよ、それ」

「むこうからやって来る。わかるかな、兄さんにこの感じ。いつも、むこうから来るんだ。次男兄さんの声も、ユミ姉さんの幻も」

「おれに関わりはない、むこうの問題」



「だから、あれは、おれじゃない」

「だから、おれには、ビジョンもなにも、おれがなにを見ているか、おれがなにを聞こうとしているか。それがよくわからないんだ」

「おまえ、それはちょっと、都合が良過ぎやしないか」

「くだらない遊びはもうやめて、ちゃんとしろちゃんと」

「ちゃんとしろって、なんだよ」

「働くんだよ、ちゃんと」

「兄さんにそんなこと言われたくないよ」

稲光、陽から地面にたたきつけられる。陽は公園を去る。ベンチにすわっていた女が、稲光と言葉を分かち合う。

「大丈夫ですか。ちょっと待ってください。あなたといま私は、この言葉を分かち合いたい。リルケ、噴水。ああ、昇ってはまた落ちてくることから。この私の内部にも、このように「存在するもの」が生まれ得るといい。ああ、手なしで、さし上げたり、受けとったりすることよ。精神のたたずみよ。毬のない毬あそびよ」